

---

Fate/CrossOverGuardian **第三章 『BLEACH編』**

蒼空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/Crossover Guardian 第三章『BLEACH編』

### 【Nコード】

N6562S

### 【作者名】

蒼空

### 【あらすじ】

長い戦いの末、ようやく答えを得た英霊エミヤ、並行世界の守護者となった彼が新たに召喚された世界は死神と虚が争い合う世界！？赤い少女との約束を胸にこれからも頑張っていくと決めたエミヤシロウ、そして虚が轟く戦場で正義の味方はオレンジ頭の死神代行、黒崎一護と邂逅する。

英霊と死神、二つの存在が交差する時、新たな運命の物語が始まるうとしていた！！

《この第三章は初めて読まれる方にも最低限解るように第一章、第二章の設定は極力使わず純粹にf a t eの再構成物にしてあります。ですので第一章、第二章を読んでなくても大丈夫と思われませんが、一応簡単な概要を下に説明しておきます》

【第五次聖杯戦争に召喚されたアヴェンジャーとアーチャー、エミヤシロウは共に敵の攻撃を受け現界でできない程の重症を負ってしまう。全てを遠坂凜と衛宮士郎に託したエミヤシロウは潔く英霊の座に消えようとしていた。しかし世界の理と契約し並行世界の守護者となっていたアヴェンジャーが自身と融合し並行世界の危機を救う使命を代わってくれば交換条件に英霊の座の契約を破棄できると聞いたエミヤシロウは運命を変える為に彼と融合し、彼の記憶と能力を受け継ぎ新たな守護者として一命を取り留めた。自分の理想は間違っていないかったと判り、再び正義の味方を目指すとしたエミヤシロウ。そして聖杯戦争が終結し遠坂凜と別れたエミヤシロウは新たな世界へと旅立ってゆくのだった】

## プロローグ（前書き）

大変長らくお待たせ致しました！！

第二章『ネギま編』では作品を途中で打ち切ってしまい、読者の皆様に多大なご迷惑をお掛けして本当に申し訳ございませんでした。更新速度は相変わらずになると思いますが、どうかこれからも応援してください。

では、初めて読む方も愛読者の方も楽しんで見てください。

## プロローグ

闇に沈んでいた意識がゆっくりと覚醒していく。  
うつすらと目を開けると其処には何も無い真っ白な光に包まれた空間が広がっている。

そして、その真っ白な世界の中を私はゆっくりと彷徨っていた。

「……そうか、此処は英霊の座と同じ世界の狭間。どうやら世界の守護者といっても基本的なシステムはサーヴァントとそう大差はないようだな。なら以前の世界の記憶も“座”と同じように『記録』になっているのか」

意識を自身の内に傾ける。

しかし、思い出せるのはその世界で得た知識や戦いの経験のみ。

「……やはり前の世界の出来事や人々の思いが無かった事にされていた。

記憶も守護者に必要な事以外は意識の片隅に統合され、余計な感情は葬る……か。

「……全く、これでは以前とあまり大差がないな……。いや、彼女のこの思いがあるだけでも私は頑張っていく事ができる」

唯一の救いは凜が私に込めた想いを抱いたまま、自分の意思を保てる事だ。

かつての私は理想を追い求めて幾度となく絶望的な戦いを繰り返し、九を救うために一を殺し、多くを救うために少数を切り捨てた、そして死すべき運命にあった百を救う為に世界と契約し、奇跡の代償として抑止の守護者<sup>カウンターガーディアン</sup>となった。

霊長の守護者であり、最高位の「人を守る力」。

だが、実際は滅びの要因を排除する体のいい掃除屋。

霊長の守護者として「人類の自滅」が起きるときに現界し、「その場にいるすべての人間を殺戮しつくす」ことで人類すべての消滅という結果を回避させる奴隷に等しい存在。

さらに、その過程で人の暗黒面を延々と見せ付けられ、信念が磨耗し理想に絶望した。

そしてかつての生き方を憎むようになり、第五次聖杯戦争の衛宮士郎を自らの手で抹殺しようとしたが、その結果は私の敗北だった。皮肉な事に衛宮士郎自身に教えられた、私の理想は間違いではなかったのだと。

そして凜のお陰で私は答えを得た”私の生涯に意味はあったのだ”とはつきりとそう言える自分がいる。

「フ……私も自分に甘くなったものだ。これでは衛宮士郎の事を笑えんな」

苦笑しつつ、目を閉じた途端、空間の裂けるような音と共に妙な浮遊感を覚えた。

キュイイイーン！

気が付くと目の前に広がっていたのは果てしなく広がる空の上、そして重力に引かれ落下していく自分の体。

そう単純な落下だった、ただし高さが尋常なものではなかった。相変わらず私の召喚には空のフリーフォールが付いて回るらしい。

「……やれやれ、またか。いい加減普通の召喚にあやかりたいものだ」

軽く見ても五百メートルはくだらない。

眼下にはどこにでもある普通の街並みが広がっている。

見覚えのある建造物から見ておそらくは日本のどこかだろう、広さはそれなりにあるが都心ではないようだ。

だが、妙な気配が街に充満しているのを感じる。

落下中ではその気配に集中出来ないの下で下の街で一番高いビルを見つけるとライダーの短剣を投影投擲しビルの手すりに絡めると同時に勢いよく引き寄せビルの頂上に着地した。

落下の衝撃でビルのコンクリートが陥没するが気にせず眼前に広がる街並みを見下ろす。

この街がどんな街なのかは知らないが、一般人がいる以上、守護者にしても正義の味方としてもこの不穏な気配は見逃せなかった。

「  
トレース・オン  
同調開始」

呪文を唱え、目を“強化”させ鷹を思わせる目で周囲を見渡す。

“強化”された眼球は、スキル『千里眼』を会得するほどの人並み外れた遠視や動体視力を持つ。

すると色々な場所で信じられないような光景が繰り広げられていた。

「何だ・・・この状況は・・・」

なんと白い骸骨のような仮面を付け胸に孔が開いた異形な化け物共が街の至る所に現れ人間を襲っているのだ。

化け物共を見て街は混乱に陥っていると思われたが街の人々に慌てた様子ない、あんな化け物が往来を闊歩しているのに見向きもされないと言う事は普通の一般人には化け物の姿が”見えていない”のだろう。

だが、化け物に襲われている者達がいれば否が応にも気付く筈・・・

・いや、中には人間ではない霊体のサーヴァントのような存在の者もいる、どうやらこの街は人間霊や魔力要素の高い者達が集まりやすい場所のようだ。

それに化け物は一般人にはあまり手を出していない、恐らく魔力要素の高い者を好んで襲っている。

「これはまた、とんでもない所に召喚されたようだな。だが、なんの関係もない人々を襲わせる訳にもいかん、悪いが始末させてもらう!」

漆黒の洋弓を投影し、魔力を帯びた剣を番えを限界まで引き絞り狙いを定め遠距離狙撃を敢行する。  
そして敵を捉え中つ光景をイメージし。

「はあっ!」

小さく呟くと同時に名もなき名剣は風を切り裂きながら、化け物を貫き、化け物は崩れるように消滅する。

さらに間髪入れず立て続けに剣を放つ、そして全ての剣は、まるで吸い込まれるようにそれぞれ化け物を貫いた。

# Side 雨竜

「・・・・・・7匹・・・・・・8匹・・・・・・9・・・・・・」

石田雨竜はただただ無関心に弧雀に霊子を押し固めて霊子の矢を放つ。



対虚用の撒餌に集まってきた虚を24時間以内に多く倒した方の勝ちという、この勝負。

死神と滅却師<sup>クインシー</sup>のどちらが優れているかを黒崎一護に証明させ、奴が無能だと言ふ事を思い知らせるのだ。

「・・・・・・・・10・・・・・・・・」

例えどんな危険な目に遭おうと、その為なら僕は命を懸ける。そして視界に11匹目の虚を捉え矢を放とうとした瞬間。

「・・・・・・・・11匹　　なっ!?!」

突如、僕が虚を捉えるより速く、上空より光の矢が飛来した。流星が落下したかと思紛う程の白光に貫かれ、虚は瞬く間に消え去った。

「ば、馬鹿な!僕以外に滅却師<sup>クインシー</sup>がいるのか!」

さらに、上空から次々と矢が降り注ぎを次々と虚を消滅させていく。つるべ撃ちのように降り注ぐ矢のスピードは明らかに僕の連射速度を上回っている。

それも一発の撃ち洩らしもない程の命中精度、圧倒的な質量と精密なまでの射撃能力はとても人間技ではない、少なくとも弓の腕は僕を凌駕している。

「凄い・・・・一体何者なんだ。でも、今は黒崎との勝負を優先したいからね、虚を倒してくれるのなら精々利用させてもらう」

僕以上の弓の使い手が現れた事に驚愕を覚えるが、虚から街の人々を護ってくれる以上味方と考えていいだろう。

それに僕は師匠の為にも死神の前で滅却師の力を証明しなければならない、何者かは知らないが街の人々は任せるとしよう。

そのまま僕は少し離れた場所の虚を捉えたと霊子の矢を放った。

（でも、気のせいかな。一瞬あの矢が剣のように見えたけど・・・流石に見間違いか、剣を矢のように飛ばすなんて聞いた事がない）

そう、彼は知る由もなかった、それが人知を超えた英霊と言う名の存在であり、剣を飛ばすと言う正に人間技ではないその攻撃が四キロもの超遠距離から放たれたモノである事は・・・

-----

「ちっ、きりがないな。一体なんなんだ、あの仮面の化け物共は、存在が悪霊的なモノなのは解るが数が尋常じゃない」

あれから百匹以上の化け物共を駆逐したがその数は一向に減らない、それどころかどんどん増える一方だ。

だが、もう一方であるの化け物共と戦っているのが私だけではないのも確認できた。

黒装束の着物を着たオレンジ頭の少年と眼鏡を掛けた学生服の少年そして黒髪の気の強そうな少女はどうやらこの手の戦いに慣れているようで、オレンジ頭の少年は巨大な刀で化け物の頭を切り裂き、眼鏡の少年は私と同じ弓使いらしく矢で化け物を倒している。

胡桃色のロングヘアの少女と体格の大きい男の二人は一般人のように見えたので助けようと思った矢先に何らかの能力が開花し二人とも化け物を倒してしまった。

男は右腕に黒い鎧を装着し、少女は六人の精霊のような存在を召喚していた、どちらも能力を使った反動か化け物を倒した途端倒れてしまう。

すると黒の羽織をなびかせて現れた深く被った帽子の男と2mの長身に剃り込みのはいった髪を三つ編みのおさげにすると言うなんとモ怪しい珍妙なファッションの二人組みが現れ二人を浦原商店と書かれた駄菓子屋に連れて行かれるのが見えた、一瞬助けに行こうかと思案したが、この世界の情報が皆無な以上、下手な真似はできないと判断し化け物の掃討に専念する。

それから幾ばくかの化け物を始末していると、突然空に巨大な罅割れが走り、化け物共がその罅に向かって一箇所に集まりだした。

「空間の歪みだと・・・嫌な予感はあるが、化け物共が固まってくれるのなら好都合だ。一気にケリをつける！！」

躊躇いもなくビルから舞い降りるように飛び降りると、強化した足で家の屋根から屋根へ移動し化け物共の後を追う。

すると遙か前方の工事現場でオレンジ頭の少年と眼鏡の少年が化け物に囲まれているが見えた。

どうやら共同戦線を張っているようだが如何せん数が多く劣勢しているようだ。

「しかしあの様子・・・仲が良いのか悪いのか。まあ、彼らの実力ならすぐにやられる事はないだろうが、早急にあの化け物の情報が欲しい今、情報収集の意味も兼ねて彼らを助ける方が得策だな」

即座に番えた剣を雨のように放ち寸分違わず命中させ、周囲の化け物を始末する。

「おわ！な、何だあ！？」

「これは！！！」

突然、剣に貫かれ消滅した化け物に驚く二人の前に私は颯爽と現れる。

戦いの危機に颯爽と登場する、これでは本当に正義のヒーローのようだな。

内心苦笑しつつも状況の把握に専念する。

「いきなりで悪いが、知っているならあの化け物共の情報を教えてくれ。こちらはろくに状況も掴めておらんのだ」

「誰だよあんた、ルキアと同じ死神か！？」

オレンジ頭の死神　黒崎一護は靴に至るまで全て黒一色の服装を見て直感的に死神と勘違いし。

「弓・・・そうか、虚を次々と滅却していたのは貴方ですね。どうやら滅却師でも死神でもないようだ、一体何者です」

滅却師　石田雨竜は手に持った弓を見て、それが滅却師の武器とは違うのに気付く、彼が自分と同じ滅却師ではない事を看破した。

「？生憎と私は死神や滅却師と言ったものではないが、とにかく今はこの化け物共を倒すのが先決だろう」

こうしている間にも化け物共が次々と雪崩れ込んで来た。

それにしても死神か、そんな伝承だけの居るかどうかも不明瞭な存在がこの世界にいるとは。

まあ、サーヴァントである私がそんな事を言えた義理はないか。

「なっ、あんた死神じゃないのか?! ということだよ石田!」

「そんなの僕が知りたいぐらいだよ! 虚を一撃で滅却できる程の人に霊絡が見えないどころか霊力も感じないなんて初めてなんだ!」

「何だよそれ! お前滅却師のくせに何にも知らないのかよ!」

「君こそ朽木さんに死神の力を与えて貰っておいて偉そうな事を言うな! 大体……」

「ゴアアアアアアアア                      !」

二人の口論にいい加減業を煮やしたのか一匹の化け物が二人に襲い掛かった。

だが、こちらも業を煮やしているのは同じだ。

「  
トレース・オン  
投影開始」

弓を手放すと同時に、新たに投影した干将・莫耶を流れるような動作で振りおろし、化け物を切り裂いた。

「いい加減にしろ!! 戦場で動きを止めるなど、君達は正気かね!」

「「!!」」

私の怒声に驚いていたが、虚空から突然現れた振り返る刃を煌かせる白と黒の双剣を見て、二人はしばし呆然としていた。

宝具としてのランクは低いとはいえ中に内包された概念は通常の武器とは比べ物にならない神秘を持っている、故に死神が使う斬魄刀さんぱくとうとはその在り方からして違うのだ。

「私の事は機会があれば話す、だから今は協力して奴らを倒すぞ」

「お、おう!!」

「・・・分かりました」

この世界の情報を得る為にも、共闘して現地協力者を味方につけるのが最善と判断し、干将・莫耶を構える。

「さあ、掛かって来い化け物共! 地獄に還る準備は万全か!!」

「グオオオオオオオオオオオ」

「!!」

私の挑発に反応したのか私達を取り囲んでいた化け物共が一斉に躍り出る、私は正面を見据えると地を蹴り、一気に間合いを詰め莫耶で首を跳ね飛ばし、二匹同時に襲い掛かってきた化け物を半身を後ろにずらして躲すと干将で大きく横に薙いで消滅させる。

そして集団から素早く距離を取ると干将・莫耶を左右に投擲した、互いに引き合う性質を持つ干将・莫耶は弧を描きながら回転していき化け物共を縦横無尽に切り裂いて行く。

すると武器を手放した私を見て好機と思ったのか、四方から同時に飛び掛かってくる化け物共を再び投影した干将・莫耶で切り刻む。

それにしても仲間の死で多少怯むかと思われたが、まるで意に介していないように次々と襲い掛かってくる、まるで統率が取れていな

い獣だな。

だが、冷静さを無くした者ほど御しやすいものもない、単調なだけの攻撃や思慮を欠いた動きでは簡単に行動を予測ができる。

「ゴアアアアアアアアアアア

！！」

予想通り我先にと囲むように殺到してきた化け物を見据え、繰り出される攻撃が私の体を捉えようとした刹那。

「クツ」

苦笑しながら勢い良く飛び上がり、遙か上空で化け物共を見下ろす。突然目の前から私の姿が消えた事で戸惑う化け物共、そして集団が一箇所に集まった所で。

「地獄への土産だ。持って行くがいい」

干将・莫耶を真下に投擲すると、化け物の一体に突き刺さり、視線が私に集中する。

それ故に化け物共は気付かなかった、風切り音と共に先程左右に投擲した干将・莫耶が真下の干将・莫耶に引き寄せられ大きな弧を描き再度飛来しているのを。

そして二対の夫婦剣は互いに引き合いながら集団の中心に迫り。

ブロックン・ファンタズム  
「壊れた幻想！！」

咄くと同時に干将・莫耶は爆発し、爆炎は周囲を巻き込み、呑み込まれた化け物を次々と消滅させていく。  
そして黒煙が晴れると、化け物の姿は跡形もなく消えていた。

「……嘘だろ、アイツたった一人で虚を全部倒しちまいやがった」

たった二十秒程で全ての虚が全滅したのを見て黒崎一護と石田雨竜、そして影からひっそりとその様子を伺っていた浦原商店のメンバーはただただ哑然としていた。

すぐさま周囲を見渡し化け物の増援が無いかを確認しようとした、その時！

- バシツ -

突然、何かが割れるような音が響き、空に走った巨大な罅割れから、とてつもない大きさの化け物が這い出ようとしている。

仮面が付いていると言う事は化け物共の同類なのだろうが、そのあまりの巨大さに他の化け物共が小さな人形程に見える。

「な……何だよあれ……！？デ……デカいなんてもんじゃねえぞ！あれも虚か！？」

「ぼ……僕が知るわけないだろう！」

二人の少年もあれだけ大きな化け物を見たのは初めてなのだろう、目に見えて動揺していた。

「  
トレス・オン  
解析開始」

徐々に姿を現わし始めた巨大な化け物を鷹の眼で解析する。

体の構造は解析出来なかったが内に魔力に似た力を持っているのは解った、その量もサーヴァントと比べるとそれ程ではない。

だが、あの巨体が街に降り立てば確実に一般人の犠牲者が出る大惨



事になる事は間違いない、姿が見えないとなれば尚更だ。  
ならばアレが完全に這い出る前に一撃で決着を着けるのみ！！

「君達の名は？」

「え、何だよ藪から棒に・・・まあ、いいけどよ。俺は黒崎一護、こいつは石田」

「雨竜だ。何度言えば分かる！」

「わりい、わりい。で、アンタは？」

「私の名は衛宮士郎<sup>エミヤシロウ</sup>。早速だが少し離れていてくれ、今からあの巨大な化け物を始末する」

「「なつ・・・!!」」

死神でも滅却師でもない謎の人物が、あんな巨大な虚を始末するとあつて二人は強張った面持ちをしていた。  
だが、その面持ちも次の瞬間には驚愕に変わっていた。

「I am the bone of my sword・《我が骨子は振れ狂う》」

再び投影した黒弓を矢のないまま構え、刀身から柄に至るまで全体が歪に振れた剣を投影し、それを弓に番える。

そこに溢れんばかりの魔力を注ぎ込み、その切っ先を巨大な化け物に向け引き絞る。

宝具のことなど知らない死神達は、その剣に秘められた、けた外れの魔力（霊力）に息を呑む。

そして限界まで引き絞った弓から、その一撃は放たれた。

「偽・螺旋剣（カラド・ボルグ？）！！」

真名の開放と共に放たれた矢は、電光を伴って空間を捻じ切りながら一直線に突き進み。

何の抵抗もなく化け物の仮面を貫いた瞬間、

「消し飛べ  
ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想！！」

内なる幻想を膨らませて偽・螺旋剣（カラド・ボルグ？）は大爆発を起こした。

巨大な爆発は衝撃波を伴って化け物の上半身を引き裂き、大気を振動させる。

そして黒煙が晴れるとそこには下半身だけの無残な軀をさらしている大虚の姿があった。  
メノスグランデ

-----

## 【Side 一護】

突然現れた衛宮士郎と名乗った人物が圧倒的な霊力を持った剣のような矢を射って大虚を倒すまでの間、まるで時間が止まった様な錯覚がこの場を支配していた。

「ふう      どうやら、終わったようだな」

構えていた弓を下ろすと、その後を追うように大虚の下半身が崩れ去った。  
メノスグランデ

「す、すげえ・・・あんなデカイ虚を一撃で倒しちまいがった・・・」

黒崎一護は明らかに自分より格上の存在が現れた事へのショックと同時に宝具の凄まじい威力に感心していた。

すると衛宮さんはいきなり背後にある建物に向かって、声を上げた。

「さて、そこで見ている者。いい加減出てたらどうだ？」

「あらゝやっぱりばれてましたか」

「!?!」

俺と石田が振り返ると、そこにはルキアの知り合いの下駄と帽子を目深にかぶった胡散臭い男・・・名前は何だっけ。

それと変な髪形の大きい眼鏡のオッサンに気の弱そうな女の子と生意気な赤毛のガキもいる。

「ゲ、ゲタ帽子・・・どうしてここに・・・？」

「いやゝ黒崎さんを助けにきたんですけど、この方に出番を取られちゃいましてね。折角ですからお手並み拝見と思った次第ですよ、えゝゝそれでは・・・はじめまして衛宮士郎さん、アタシは浦原商店のしがない店主をしております、浦原喜助と申します。以後お見知りおきを」

扇子で口元を隠しながら相変わらず飄々とした物言いで喋っているが、今はどうでもいい。

それよりも衛宮さんだ、こそこそいているゲタ帽子より、あの人が

何者かの方が大事だ。

「なあ、衛宮さん、アンタ一体　　っ!」

衛宮さんに話し掛けようとした瞬間、まるで体が何倍にも重くなつたかのように動けなくなり、気温が一気に数十度下がつたかのような悪寒が走り、背筋には冷たい汗が流れていた。

[illegible]

体に力が入らず、頭の中に自分が殺されるイメージが何度もリピートさせられた。

伊達に今まで虚と戦ってきた訳じゃねえから、これが殺気ってヤツなのは分かる。

けど、これはレベルが違う、死神が放つ純粋な霊圧は威圧感や実質的な圧力を伴うがそれだけだ。

だが、衛宮士郎の放つ殺気は霊圧とは比べ物にならないドス黒い畏怖の渦、知覚したら最後体の奥にある本能が動きを鈍らせる。それこそが命懸けの戦いにおいて正に命取りになるのだ。

「ほう、これはこれは。凄い殺気っすねえ、普通の人なら気絶してるっすよ、それに悪ければ自殺すらしかねません。まったく、これからは気を付けて殺気を放ってくださいよ」

「ふむ、貴様に向けた威嚇とはいえ、確かに関係のない者達にまで

殺気を浴びせてしまったのは私の落ち度だ。改めてこちらの非礼を詫びよう、すまなかった」

衛宮さんが俺達に頭を下げると、体を取り巻いていた殺気が消え去っていた。

「はあ！・・・はっ・・・はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

顔を上げると体の至る所からドツと汗が噴き出した、立っているだけでも膝が震え座り込みそうになる。

それにしても、こっちは座り込むのを必死で抑えているのに、ゲタ帽子は軽く受け流してやがる。

ゲタ帽子と変なオッサン以外のヤツらは俺と同様、座り込むのを必死に堪えている、ただその表情は動揺に満ちていた。

「だが、元はといえば貴様が妙な気を放ったからだろう。人間が放つには少々歪んでいたぞ」

「いやいや、霊圧を放ったのは衛宮さんが死神かどうか判断する為ですから、敵意はないんですよ。ですけど、これでハッキリしたっス・・・衛宮さん、貴方は人間でも死神でも滅却師でも虚でもありませんね。いや、どちらかと言えば肉体を持った魂魄こんぱくに近い、しかも死神に匹敵する強さを持った。こんな事例は初めてですよ、一体何者っスか」

全員の視線が衛宮さんに集まる中、衛宮さんは腕を組みながら、やれやれと言った表情でため息を吐いた。

「そつだな、話すにしても長くなる。どこか落ち着ける場所はあるかね」

「では、アタシの店でどうっスか。よかったら黒崎さん達もいかがです」

ゲタ帽子は含みのある顔で俺を見ている。

「もちろん行くに決まってるだろ、衛宮さんが何者なのかは俺も気になるからな」

振り返ると石田も同じ気持ちなのか頷いている。  
しかし、ルキアだけは覇気のない顔をしていた。

「どうした、ルキア？」

「・・・いや、なんでもない」

「では、行きましょうか皆さん」

ゲタ帽子は衛宮さんを先導するように歩き出す。  
そして俺達がゲタ帽子の店に向かう中、ルキアは誰にも聞こえないように呟いた。

「・・・メノスが現れ・・・それを消滅させた・・・この情報は・・・  
恐らく、じき戸魂界へと伝わる・・・そうなれば・・・恐らく私  
と一護は・・・」

・・・殺されるだろうな・・・

ルキアはその言葉を口には出さず、心に秘める。  
その言葉が現実のモノになろうとは、この時の俺は夢にも思わなかった。

そして歴史の運命は英霊・エミヤシロウが加わった事で大きく形を変えていくのだった

## プロローグ（後書き）



## 一話（前書き）

遅くなってしまい申し訳御座いません。

やはり新章に突入してもモチベーションの回復が出来ず、一日数行程しか進まず今日まで掛かってしまいました。

更に今回は説明回なのでストーリー的にはあまり進んでいません、次回はもう少し早く投稿できるよう頑張ってみるので、それまでどうかお待ちください。

## 一話

浦原喜助と名乗った男は自分の店である浦原商店まで来ると私達を小さな居間に案内し、お茶を差し出す。

「狭い所で恐縮ですが、どうぞお掛けください」

黒崎達や店の面々は疲れたように座るが私は玄関口を背に立つたまま腕を組む。

「あれ？衛宮さんは座らないんですか」

「いや、私はこのままでいい。過去からの経験でな、何時襲われても素早く反応できるように初めて跨ぐ敷居では座らない主義なんだ。しかし礼儀と言うなら従おう」

「いやいや、流石は衛宮さん。ベテランの貫禄がありますねえ」

そう言つて相手より先に自分が座らないあたり、油断できん相手だ。深く被った帽子で目元は見えないが、恐らくこういった腹の探り合いを楽しんでいるのだろう。

「さて、ではそろそろ本題といきましょうか衛宮さん？」

「・・・・・・・・」

マズイな、相手の手札が解らん以上、安易にこちらの手札を晒す訳にはいかん。

ここは私がいかに重要な存在かを認識させた上、交渉に持っていく

のが理想か。

「こちらとしては情報の整理の為に、そちらから話してもらいたいのだが」

「おやゝ説明を求められたのは貴方からではありませんでしたか。それをアタシ達の方から先とは、ちよいと虫が良すぎやしませんか」

「別に私は無理に貴様から聞けなくてもかまわんのだがな、いやなら別口を探すだけだ。それとも強引に聴き出すか？」

「まさか、アタシはしがない駄菓子屋の店主ですよ。そんなことはとてもとても・・・」

「そうかな？その杖の刀から察するに貴様は黒崎の同類だろう、それも相当な力を持った」

「！！」

「黒崎達に正体を隠すからには何か事情があるのだろう。だが、いいのかな、私をこのまま帰してしまつて。貴様達もこの情報が他に漏れるのは避けたい筈、ならここは禍根を残さないのがお互いの為だろう？」

- ガタ -

三つ編みおさげの大男が立ち上がろうとするが、私は殺気ではなく威圧感で相手を牽制する。

その威圧感を感じ浦原喜助はじっと私を見据えていたが、観念したのか含みのある笑みを浮かべた。

「……いや、流石ですね。交渉も手馴れてらっしゃる、いいでしょう。まず、こちらの事からお話します」

そう言つて浦原喜助はゆつくりとこの世界の全てを語り出したのだつた……

話は思ひのほか早く終わった。

幸いな事に話の内容には魔術に通ずる箇所があつた為、理解も早く済んだ。

「……死んだ人間は魂魄ホロウと呼ばれる存在となり、それが整プラス、半虚デミとなつていき胸の因果の鎖いんがのくさりが全て消えると、最終的にあの仮面の化け物『虚』になると言う事か」

「ええ、そうです。そして魂魄と虚を、尸魂界ソウル・ソサエティに送る者達の事を死神と呼びます。」

彼らの仕事は現世と尸魂界の魂魄を斬魄刀で浄化し2つの世界の魂魄の量を常に均等にする事、そして現世に現れる虚を昇華・滅却させる事です」

「……一つ聴きたいのだが、何故死神はそこまでして現世での魂魄送りや虚に拘るのだ？死神も尸魂界と呼ばれる世界の存在である以上、無理に現世に関わる必要は筈だろう？」

「衛宮殿、そこは私が説明します」

乗り出したのは黒髪の女の子、確かルキアと呼ばれていたな。

先程の戦闘で黒崎が私にこの少女の仲間か？と聞かされていたのを思い出し、この少女も死神なのだろうと推測する。

「尸魂界では、死神の位階にある者達を俗に調整者と呼ぶことがあります。そもそも何故、尸魂界と現世の魂魄の量を常に均等にするのか分かりますか？そうしなければ2つ世界のバランスが崩れ、双方の崩壊を招くのです。それを調節する役目を持つもの、それが死神でありその任務を司る部隊を護廷十三隊と呼びます」

「……確認するがその護廷十三隊こていじゅうさんたいとやは、この世界の守護を担っているのは間違いないのだね」

「もちろんです！我々護廷十三隊こていじゅうさんたいは尸魂界から放たれた魂が現世の生物として生まれるまで見守り、現世で死した魂は死神の手で再び尸魂界へと還してゆく、それは虚とて例外ではありません。そうして魂魄の運行の全てをゆだねることにより尸魂界は魂魄の量を把握し、現世との調整を計ってきたのです」

成程、在り方は大分違うが世界を守護すると言う意味では死神は守

護者と似ているな。

考え方も魔術師が根源の渦を目指す過程で抑止力の影響を最小にするやり方と同義だ。

どうやらこの世界では魔術師の代わりに死神がその役割を担っているようだ。

「では逆に聞くが君達は魂魄の調整の為に必要とあらばこの世界の霊長類を殺す事もするのか？」

これだけはハッキリさせなくては。

たとえ世界の為とはいえ死神に生者の命を奪う権利は無い。

それでも彼等が神の傲慢ように生殺与奪を行うなら、死神は私の敵だ。

「とんでもない！！我々は全ての生命を虚から守っています。死神は決してそんな事は」

「そう断言できるのか、君が如何程の地位にいるかは知らないが組織と言う存在には総じて表に出せない闇の部分があるものだ」

「そ・・・それは・・・」

「どうやら心当たりがあるようだ。組織とはそれ自体が個々に独立した生き物だ、構成する者達の考えとは別に、独自の考えを持つ。そしてそれが大儀の為と言われれば個人の意思など容易く切り捨てられる。君も組織の者ならば覚えがある筈だ」

「！！」

ビクッと震え顔を悪くした少女を前にして、私は生前を思い出し

てた。

組織というものがどれほど信用できない存在なのかは、骨身に沁みて知っている。

代表的なのは魔術協会だ。

魔術協会とは魔術を管理・隠匿し、その更なる発展（衰退とも言う）の為の研究機関。

魔術を秘匿する為なら、例え一般人でも犠牲にし、あくまで神秘の漏洩を防ぐ為だけに行動する組織。

その中でも一番の厄介事が保護の名目のもとに拘束・拿捕され、一生涯幽閉される封印指定だ。

私は自身の特異性と人目を憚らずに魔術を使った事で、封印指定を受け異端狩りの代行者に追われた事もあった。

まあ、死んで英霊となった今では苦い思い出の一つだ。

その経験故に組織というモノに関わること自体、生理的な拒否感がある。

ただ魔術協会のような秩序を守るための機関が必要なのは否定しない、組織という存在が何かとメリットが多いのも事実だ。

だが、この世界の死神が絶対に魔術協会のような事はしない、とは誰にも言えないのだ。

「……すまない、失言だった。死神でもない私が死神の事をとやかく言う資格は無いな、君も護廷十三隊の死神の一人である以上その仕事に誇りを持てばいい。私が言ったのはあくまで人間社会が生んだ一つの例だ、必ずしも全ての組織がそうではないと私は思っている、君は君の信じる道を行けばいいさ」

「……はい……」

多少は納得出来たのか先程より顔色が良くなったようだ。  
場の雰囲気は落ち着いて来た所で浦原喜助が狙い済ましたように口を開いた。

「さて、ではそろそろ衛宮さんの話を聞きましょうか。もう十分こちらの情報は教えたでしょう、今度はこちらの番です」

全員の視線が集まる中、私はどう説明するかを思案する。

（さて、何から話すべきか・・・しかし下手な事を言つてこの連中を敵にするのは避けたい）

そして考えをまとめると、私はゆっくりと話し始めた。

31

# 【Side 一護】

「そうだな・・・君達は、並行世界という概念を知っているかね？」

衛宮さんの第一声は、一見彼の正体と関係なさそうなそんな言葉から始まった。

そしてその説明も俺の予想を大きく超える衝撃的なモノだった。

なんでも並行世界と呼ばれる俺達の世界と殆ど変わらない世界が無数にあるらしく、衛宮さんはその無数の世界の狭間をトンネルのように渡れる能力があるらしい。

そして衛宮さん自身、実は人間ではなく、生前偉大な功績をあげた



英霊と呼ばれる亡霊に近い存在で、ある理由によって肉体と世界を渡る能力を手に入れた事で色々な世界を旅しているとの事だ。

「つまり貴方は、異世界からやって来た英霊と呼ばれる魂魄であり、旅の途中で偶然この世界に来たと言うのですか？」

「そうだな、概ねそんな所だ」

もちろん半分以上がでっちあげだ。

突然”この世界に危機が迫っている、その元凶を作る者を倒す為に世界の守護者である私が召喚された、この世界を救う為に協力して欲しい”と言われても場が混乱するだけでなくへたをすればこの世界全体が敵となるだろう。

だからこそ衛宮士郎は真実を伏せ、当たり障りのない嘘でこの場を収める事にした。

「信じられないかね？まあ、突然こんな話をされては頭がイカれていると思われてもしかたがないだろう。むろん無理に信じろとは言わない、ただの妄言と取ってくれてもかまわんよ」

確かにここまで荒唐無稽な話を信じる方がどうかしている。

しかしその嘘とも思えない奇妙な信憑性に俺が悩んでいると、衛宮さんがやれやれと言った様子で話かけてきた。

「この世界には尸魂界なる別の世界があるのだろうか？なら、まだ君達の知らない別の世界があっても不思議ではない筈だ。そんな固定概念に囚われては戦場では生き残れないぞ黒崎。何事にも臨機応変に対応してこそ物事の視野が広がるというものだ」

年上特有の上から目線で言われて流石の俺もいい気分ではなかった。

だから意趣返しとばかりにさっきから疑問に思っていた事をぶつけてみた。

「・・・衛宮さん、アンタが尸魂界でもない別の世界から来たっていう証拠はあるのかよ。証拠がなきゃ衛宮さんの話はただの妄言だぜ、俺が納得するような証拠を見せてくれなきゃ俺はアンタを信用しないぜ!!」

いくら衛宮さんが虚を倒し、俺達を助けてくれるとしても得体の知れない味方に背中を預けるなんて事は出来ない。  
他の奴等も同じ心境なのか黙って成り行きを見守っている。

「証拠か・・・そうだな」

衛宮さんは何事か考えみながら周囲を見渡すと、不意に俺に目を留めた。

「ふむ、形だけならなんとかなるか

トレース・オン  
投影開始」

「えっ!?!」

突然、先程の戦闘で呟いた謎の単語を紡いだ瞬間、衛宮さんの手に俺の斬魄刀が現れた。

「「「「「なっ!!」「」「」」」」

「これは私がいた世界で使われている魔術と呼ばれる技術だ。そして魔術を扱い研究する者の事を魔術師と言い、今やったのがその内の一つでもある投影という魔術だ」

「魔術に投影？」

そんなオカルトじみたものが・・・いや、それを言うなら幽霊以上存在である死神の方が余程オカルトだ。

「投影と言うのは単純に言えば物の複製を作る魔術でね、私は魔術師としては二流だがこの投影に関してだけは誰にも負けないと自負している」

「その投影つてのは、もしかして大虚を一撃で倒したあの擦れた剣の事か？」

「そうだ、あれはカラド・ボルグと呼ばれる宝具を投影した複製品だ。君達も名前くらいは聞いた事はあるだろう」

「うーん、カラド・ボルグ・・・どこかで聞いたような気がするんだが」

心当たりを思案し首を傾げていると、今までだんまりしていた石田が驚いたように口を開いた。

「もしかして、あのケルト神話のアルスター伝説に出てきた三つの丘の頂を切り落としたといわれる伝説の魔剣『カラドボルグ』ですか！？」

「ほお、君は神話に詳しいか？その年でそこまで知っているとは大したものだ」

「いえ、たまたま文献を読んで覚えていただけです。それよりもそんな伝説の魔剣を複製する貴方の方が凄いですよ。ですがこれで貴

方の話の信憑性が増してきました、少なくともこの現世でそんな事が出来る人間はいません・・・最も死神はどうかは知りませんが」

視線をルキアやゲタ帽子に向ける石田、やっぱりあいつの師匠の事は簡単には忘れられないか。

でも、出会った当初のトゲトゲしさはない、あいつはあいつなりに師匠の事にケジメをつけたんだろう。

「・・・いや、死神の鬼道とも違う。確かに尸魂界でもこんな業は見た事も聞いた事もない」

「・・・アタシもです、こりゃあ衛宮さんの話は本当かもしれないせんねえ。いいでしょう衛宮さんの話を信じましょう！」

こうなつてはもう認めるしかないな。

まあ、どちらにせよ味方である以上衛宮さんが頼もしい人なのは間違いない。

今はそう信じよう。

「とりあえず敵でないと信じてくれたようで何よりだ。そこで、だ君達に相談したい事があるのだからいいかな？」

「はて？なんでしょうか」

一拍置いて、衛宮さんとはんでもない事を言い出した。

「すまないがしばらくの間、誰か宿を貸してくれないか。流石に住所不定の文無しでは生活もままならなくてね、代わりにその家の家事全般を私が引き受けよう。心配するな、それでもイギリスで知り合いの貴族の家で執事をしていた経験がある、ついでに言えば和食、

洋食、中華もできるのでレパートリーには困らんよ。それに一応は大学レベルの学習も習得しているので勉強も教えられるぞ」

「……マジで？」

「このようなことで嘘を言っでどうする？……ふむ、では夜にはまだ少し早いが夕食は私が振るおう、浦原さんよければ厨房と材料を借りて良いかね？」

「え……ええ、どうぞ……」

「では、お言葉に甘えて」

居間を横切り厨房に向かう衛宮さん。

しかも、どこから取り出したのかエプロンを装着し、そのまま厨房に消えていった。

「……………」

その光景を俺達はばかんとした顔で見送っている。そして皆の心中は驚いた事に同じ感想を述べていた。

『曰く、何故か衛宮さんのエプロン姿はかなり似合っている、と』

—————  
—————

冷蔵庫にある材料で出来うる限りの美味しい料理を作る、それが私の務めであり私の誇りだ。

それは奇しくも生前、セイバーの為に美味しい料理を作っていた頃

と似ている。

そんな懐かしい感傷に苦笑しつつも料理に専念し、料理は二時間程で完成した。

「さて、こんなところか」

メニューは、昆布でしつかり出汁を取った豆腐の味噌汁、たことわかめの酢の物に大根おろしを添えたブリの照り焼き、そしてメインに柚子で香りをつけた炊き込みご飯、などの和食料理だ。

何故和食なのかと問われれば、和食は私が最も自信のある料理で、更に言えばこの家にはそういった食材しか家には無かったからだ。

不思議に思ったが他人の家の事情に首をつっこむのは野暮と言うものだ。

気にせず完成した料理を居間の卓袱台に次々と運ぶ度に全員があっけにとられた表情で料理を凝視していた。

同時に目の前の料理の鮮やかさにごくりと喉を鳴らしている。

そして最後の皿を並べ終わると。

「在り合わせの材料で作ったが味は保障するよ。さあ、遠慮なく食べてください」

「……………いただきます……………」

腕を組んで得意気に呟くと全員が箸を掴み、恐る恐る卓袱台の上に広がる料理に手を伸ばし料理を口にした瞬間。

「……………う、美味しい……………」

「……………！！……………」

「……………」

あまりの美味さに黒崎達から絶賛の声が上がり、浦原商店の面々も静かに圧倒されていた。

その顔は声に出さずとも、美味いと言っているに等しい行為だろう。私は、それを見てニヤリ、と顔を綻ばせる。

「どうした、口に合わなかったかね？」

浦原以外の三人に問いかけると、予想通りの返事が返ってきた。

「いえ、と……とってもおいしいです」

「ま……まあまあだな。これなら次も食べてやらねえでもないぜ」

「お見事……！料理では私の負けのようですな」

「それはなによりだ、作った甲斐があると言うものだよ。デザートに抹茶寒天を用意してあるからドンドン食べてくれ」

「……衛宮さんてコツクの英霊かなにかなんですか」

「ク、残念だが料理は趣味のようなものでね、知人達と一緒に切磋琢磨している内にいつの間にか腕前が上がっていたんだよ」

「そう言えば昔、凜から”衛宮君、貴方料理人やお菓子職人を目指したほうがよっぽど世界のためになるんじゃないの！”と言われた事があったな。」

あの時はそんなこと言われても、余り嬉しくなかったのだが今はそれも悪くないかもな、と思い始めていた。

それ以降は全員、食べるのに夢中になっていた。

只黙々と箸を動かしている者もいれば賛辞の嵐を述べる者もいる。その楽しそうな笑顔を見て、久しぶりに嬉しさが込み上げてきた、やはり自分の料理を美味しく食べてくれる人達がいるのは嬉しいものだな。

それから五分もしないうちに皿にあつた料理が空となり、その日の夕食はお開きとなった。

「ご馳走様でした衛宮さん。こんなに美味い料理を食つたのは初めてでしたよ」

「いやいや、残さず食べてくれたので私も嬉しいよ。片付けも私がやっておくので安心してくれ、それと私の事はシロウと呼び捨ててくれて構わんよ」

「わかりました、これからもよろしく士郎さん」

「それじゃあ、衛宮さん。片付けの方、お願いします」

「ああ、任せろ」

全員分の食器を流しに持って行き、皿洗いを始める。

時間を掛けず、手早く終わらせると今後の事を話し合う。

「ところで、私の居候先は何処になったのだ。私の要望としては数日の間、部屋さえ貸してくれればいい。一時的な住所があれば後は自分でなんとか出来る、どうだろうか？」

「それなんですがね士郎さん。どうです、ウチに泊まっていきませんか」



「この浦原商店で？でもいいのか、まだ怪しい私を自分と同じ屋根の下に泊めて」

「なあに、これでも人を見る目は結構あるんですよ。それ・に・部屋も広さも十二分にあるので安心してください」

最後の言葉が少し気になったが、今はお言葉に甘えとしよう。

「すまない、世話になる」

交渉成立とばかりに手を差し出し握手をする。  
そしてこの世界に来てからの最初の夜が更けていったのだった。

一方その頃。

尸魂界では二つの影が穿界門せんかいもんの前に立っていた。

「朽木ルキアの捕縛及び抹殺。こんなの俺ら死神の仕事じゃないスよね隊長」

「・・・恋次、忘れたか、もう一つの勅命を」

「ああ、例の未確認の霊圧が大虚を消滅させた時に観測されたって言う異常な霊圧の調査でしたね。けど本当なんですかねえ、現世に大虚を倒せる程の奴がいるなんて、なんかの間違いじゃないですか」

「それを調査するのが我々の任務だ。観測された霊圧は副隊長クラ

スをゆうに超えていたとのこと、油断すれば足元を掬われるぞ」

「へえ、そりゃ戦うのが楽しみスね」

「・・・出るぞ、地獄蝶を放せ」

- ギイイイイイイイイイ -

二人の死神が門を潜り、ヒラヒラと舞う地獄蝶に導かれ現世へと降り立った。

こうしてエミヤシロウを中心にした運命の物語は複雑に絡み合いながら今、幕を開けたのだった

## 二話（前書き）

長らくお待たせして申し訳ございません！！

三週間ほどパソコンを修理してまして、予定より少し遅れましたがなんとか完成しました（汗）

急いで仕上げた為、多少あべこべな箇所があるかもしれませんが（泣）  
もしおかしな所がありましたら遠慮なく言ってください、ではどうぞ楽しんでお読みください（笑）

## 二話

『ありがとうございます』

自動ドアをくぐり、夏の炎天下の中を両手一杯に買い物袋を抱えた衛宮士郎

が歩いていた。

「さて、夕食の材料はこれで十分だろう」

スーパーでこれからの生活用品や浦原商店へ食料の買出しを終え帰路に着く。

と、ここで説明しなければなるまい。

何故文無しの衛宮士郎が買い物できるだけの金銭をもっているのかを。

答えは簡単、だがこれこそが衛宮士郎が持つ強みの一つであり、平行世界を渡っていく上で最も効率のいい反則技なのだ。

その反則技とは投影した品々を質屋に売るという正に裏技もいいとこの方法なのである。

なにせ元手は自分の魔力だ、放っておいても半永久的に消えないので法には触れていない、もちろん投影した物は予め贗作だと言い含めてあるので多少値は落ちるが十分な金額になる。

ところで何故こんなに手馴れているのかと問われれば、以前凜の宝石代を工面する為に同じ手法で金銭を調達していた事があったのだ。ある意味犯罪に手を染めているようで正義の味方を目指していた当時の自分としては複雑な心境だったのを覚えている。

「ク、いかな、あれから昔の事ばかりを思い出す。やはり凜達のおかげで私も変わったという訳かな」

あのイレギュラーだらけの聖杯戦争は私の心境に大きな変化を与えたようだ。

抑止の守護者として戦いの日々明け暮れた頃には考えられなかった程だ。

自身の変化に苦笑しつつ、浦原商店に戻ると店先に黒猫が空を見上げながら佇んでいた。

エサをねだりにきた野良猫だろうがその堂々した佇まいは歴戦の強者に見える、そういえば買い物袋の中にダシ用のにぼしがあったのを思い出し、黒猫の前に差し出しみた。

「ほれ、この世界で最初に会った猫への記念だ。しばらくこの店に滞在するから気が向いたらまた来るといい、ご飯くらいはだしてやるわ」

「・・・」

で、猫相手に話しかけるなどこれでは友達のいないただの寂しい男ではないか！

急に気恥ずかしくなり店に入ろうと振り返ると、後ろで浦原がニヤニヤと笑っていた。

「いや、中々面白いものが見れましたよ、衛宮さんてけっこう動物好きだったんですね」

「・・・不覚だった、最近の私は気が弛んでいるな。集中力が足りてない証拠だ」

「そうでもないぞ、こやつの歩法はワシ並じゃからな。常人ではまず気付かん、まあ、気にするな」

「っ!？」

「

突然真後ろから声がしたので慌てて殺気を籠めて振り返るが、そこには先程の黒猫以外誰もいない。

「ほお、身震いするような凄まじい殺気。ふむ、喜助の話もまんざら嘘ではないようじゃ」

（!？また後ろを取られただと！次から次に一体どうなっているのだ!！）

数々の戦場で鍛えられた危機察知の洞察力がこの世界に来てから見る影もない、私が後ろを取られるなど英霊になってから一度もなかった事、あるとすればアサシンが持つ気配遮断のスキルぐらいなものだ。

そのアサシンでも攻撃態勢に移る時は気配遮断のランクは大きく落ちるはず、それをあの声の主は難なく成し遂げた、それだけ取ってもこの声の主はアサシンより数段上の實力を持っている事になる。

しかし、こんな近くで声がするのにその姿すら見えないとは、一体何処に……

「これ、いい加減せい下じゃ、下!」

「はい……?」

先程の声が今度は足元から聞こえてきた。

恐る恐る下を向くが相変わらずそこにいるのは黒猫のみ、まさか猫が喋るはず……

「なにを呆けておる、ワシが喋るのがそんなにおかしいか」

「……いいさ、認めようじゃないか！魔術師も使い魔を触媒にして音声を送る事ぐらいは出来る。

それに、この世界は私がいた世界とは違うのだ、猫が人語を喋ったからといって動揺することはない、落ち着いて冷静になれ、とりあえずこの猫を調べて見なくては。

#### トレース・オン 解析開始

心の中で呪文を唱え、目の前の猫を解析してみた。

基本骨子、解明

構成材質、解明

その結果、生物学的には完全な猫であるのだが、内に秘められた魔力が動物や人間とは桁違いだ、先日の大虚と比べても同等……いや、それ以上だ。

「貴様一体何者だ、動物でその膨大な魔力……いや、霊力はあるえない。間違いなく言える事は貴様は猫の姿をした人間以上の存在だろう？」

「流石じゃのう、喜助が興味を持った男だけのことはある。ワシの名は四楓院夜一、しほいついん 実はおぬしに折り入って頼みたい事がある」

「何……」

猫に頼みごとをされたなどまるで童話だ。

もしこの話を凜が聞いたら腹を抱えて笑いころげるだろう。

そんな場面を想像していると浦原が真剣な顔で私に詰め寄ってきた。

「衛宮さん、そのことでちょっとお話が……」

まさかその頼みが、この世界での今後を担う事になるうとはこの時の私は想像もしていなかったのだった。

-----

# 【Side 一護】

ルキアが尸魂界との間で危険な事になっているとの手紙を見つけ、追いかけてようにも死神化できずにあたふたしているとゲタ帽子の奴が現れて俺を死神化し、ルキアのもとへと送り出した。

そして駆けつけた時、そこにいたのは、シャツを赤色に染めて地面に倒れている石田とそれを見て愕然としているルキア、そして俺と同じ黒い着物を着た二人組みだった

俺はなんとか石田を斬ろうとした赤髪の男に一太刀入れたが、もう一人の男の圧倒的な力の前に手も脚も出ず体を貫かれ俺は身動きできないでいた。

「はっ……離せ恋次！一護が……っ!!」

「何言っただてめえ!?よく見ろ!あのガキは死んだ!!」



（くそ！！勝手に殺すんじゃないよ、それにまだ終わってねえ！）

必死に体を起こそうとするが体は動いてくれず、代わりに体からいたずらに血が流れている。

そしてただ近くでルキアの必死な声が聞こえるだけだった。

「一護は・・・私が巻き込んだ・・・私の所為で死んだのだ！！」

（バカ・・・お前のおかげで俺は親父や妹達を護れたんだ、むしろ感謝してるんだよ）

「私の所為で死んだ者の傍に私が駆け寄って何が悪い！！」

「・・・たとえ我が罪が重くなるとも・・・駆け寄らずにはおられぬというわけか、この子供の許へ」

「・・・兄様・・・」

（ルキア、お前・・・）

「・・・解るぞルキア・・・成程、この子供は  
奴によく似ている・・・」

「っ！！」

唯一動く腕を伸ばしルキアが兄と呼んだ男の裾を掴んだ。

「・・・もう、死んでるだの・・・誰ソレに、似てるだの・・・俺のいねー間に勝手にハナシ進めてんじゃないよ・・・！」

息も絶え絶えで凄むがアイツは見向きもしない

「……—……」

「……放せ小僧」

「……聞こえねーよ……こつち向いて喋れ……」

「……そうか……余程その腕、いらぬと見える……だが、その腕を切り落とす前に一つ聞く事がある。大虚を消滅させたのは誰だ、よもや貴様ではあるまい」

(！？こいつら士郎さんを……)

「はっ！！悪いか……あの鼻デカノッポなら……テメー等が……あんまりモタモタしてやがったから……俺が倒してやったよ……」

すると奴はようやくこつちを向いた、だがその眼は感情がないかのように冷たく、まるで俺に興味がないかのように見下している。

「……戯言はそこまでだ、死ぬがいい」

そして奴が刀を抜こうと柄に手をかけた瞬間。

・ヒュン・

「……！！」

突然何かが高速で飛来する音が聞こえ、奴は消えるように後ろに下

がった。

すると夜の闇を切り裂き、奴がいた場所に一本の剣が突き刺さっていた。

「この剣は・・・まさか・・・」

体に痛みが走る中後ろを振り返ると、そこには漆黒の外套を纏った士郎さんが立っていた。

「し・・・士郎さん・・・なんで・・・ここに・・・」

「知り合いを助けるのは当然だろう。それに奴等の狙いも私らしいからな、ならこちらから出向いてやろうと思ったまでだ。まあ、こは私に任せておけ最善は尽くす」

「士郎さん・・・」

士郎さんは俺の前に進むと目を瞑り、宣言した。

「さあ、お前達はどうする。続けるかね、それとも」

そして目を開いた瞬間。

「殺される覚悟はあるか・・・」

「ゾッ」

「っ!？」

それは俺に向いていないとはいえ、昨日感じた殺気が霞んでしまう

程の圧倒的な殺気だった。

これが士郎さんの本気の殺気・・・昨日の殺気がいかに手加減されていたのが解る。

「・・・何者だ貴様」

放たれた殺気を感じたのかルキアと同じ姓を持つ男、朽木白哉は現世に来て、初めて臨戦態勢を取った。

「ク、なに、通りすがりの正義の味方さ」

「ちっ、次から次に邪魔が入りやがって。おい、てめーはそのガキの仲間か、そうならてめーも叩き斬るぜ」

「ほう、君如きが私を斬れるのかね？でもしない口上はそれだけの実力を伴ってから吐きたまえ」

「・・・上等だ、てめーのその首、隊の土産にして祝い膳に飾ってやるよ！！」

「まったく、血の気が多いのは結構だが、もう少し感謝してもらいたいな。今のは心からの善意で言ったのだがね」

「殺す！！！！！」

挑発するような口調で笑う士郎さんに赤髪は容赦なく襲い掛かった。しかし、士郎さんその様子を見て溜息を吐き、やれやれと呟いた。

「策もなく、この程度の挑発で間合いを詰めるとは、これでは護廷十三隊とやらの程度が知れるな

トレス・オン  
投影開始！」

例の呪文を唱えると二本の柄の短い細身の剣が片手に一本づつ現れ、奇妙な構えをすると連続で投げ付けた。

だが、最初の剣は容易に弾き飛ばされた、赤髪は二本目もその調子で弾こうとしたが。

「ギイイイイイン」

「ぐあっ!？」

剣が刀に触れた瞬間、逆に刀が弾かれ赤髪は体勢を崩した。

士郎さんはその隙を見逃さず、一気に懐に入り奴の腹部目掛けて蹴りを叩き込んだ。

赤髪はトラックに衝突されたように吹っ飛び、地面を5、6度程転がるがすぐに体勢を立て直した。

だが、無傷とはいかず赤髪は激しく咳き込んでいる。

「がっ・・・がっ・・・くそ!」

「得物で打ち合うだけが戦いではない、よく覚えておくことだ」

「ぐっ、どうなってやがる・・・てめー、一体何しやがった」

「ふむ、今のは鉄甲作用と言ってな、物質に通常の数倍の威力を持たせることができる。人間が考えた純然たる投擲技法さ」

「デタラメだ!死神が人間如きの技にやられるかよ」

「ではどうかね、その人間の技で刀を弾かれた気分は、さぞ滑稽なのだろうな」

「だ、黙りやがれ、この野郎

！！！！」

素早く落ちていた刀を拾い、再び斬りかかる赤髪。

士郎さんも再び剣を出すのかと思っていたが、予想に反して手の中に現れたのは赤い布だった

「どのみち貴様ではラチがあかん、しばらく大人しくしている・・・」  
「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」！！」

咄くと同時に赤い布を放つと、布は意思を持ったかのように体に巻きつき、赤髪は全身を雁字搦めに拘束された。

「何だ！？くそ、体に絡みついてほどけねえ」

「無駄だ、こいつはマグダラの聖骸布とよばれる、対男性拘束に特化した特別製の布でね。これに拘束されると男である限り能力ごと封じられて逃れられん、なんなら試してみるといい」

「上等じゃねえか、こんな布切れにそんな大層な力がある訳ねえ」

赤髪は力任せに引きちぎろうとするが、一向に拘束が解かれる気配は無い、もはや完全な芋虫状態だった。

「分かってもらえたかね、ではそこで静かにしていたまえ。さて・・・  
・流石に貴様が相手では私も気を引き締めなければなるまい、護廷十三隊、六番隊隊長・・・朽木白哉」

奴は相変わらずの無表情で士郎さんを見つめている、しかし奴から放たれる凄まじい霊圧は霊力の察知に鈍感な俺でも霊圧がまるで目

に視えるようにヒシヒシと伝わってくる

「・・・今一度問う、貴公は何者だ」

「言った筈だ、正義の味方だと。仮に貴様達が正義だと言うなら、無抵抗の少年を殺すようでは貴様達死神が掲げる正義はよっぽど質が悪いようだな」

挑発とも取れる物言いに全く反応を示さない朽木白哉。

一瞬で俺を倒しただけにその圧倒的な実力が解る。

いくら士郎さんが強くても、腕の振りさえ見えない程の剣技に眼にも映らない速さを持つあの男に勝てるのだろうか・・・

「・・・そうか、これ以上我々の誇りを汚すと言うなら、その罪は貴公の命で購ってもらおう」

「生憎と、はいそうですかと命を差し出す訳にはいかん。私にはこの世界でやらねばならん使命があるのだ  
トレース・オン  
投影・開始」

両手に白と黒の中華風の剣が現れると、士郎さんは腕をだらりと降りし自然体で構えている、その姿は獲物を待つ猛禽類のように見える。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

交差する視線と殺気、息苦しい沈黙が永遠に続くと思われた刹那。

・ザシュ・

一瞬の間に朽木白哉の姿が消え、そして再び現れた時、両者の立ち位置が入れ替わっていた。

だが、両者には決定的に違っている事がある、それは着物に切り傷があるものの無傷で佇んでいる朽木白哉と左腕から血を流し膝を付いている土郎さんだ。

「ぐ……攻撃箇所を限定して動きを読んでも、速すぎて体がその動きについていかんとは。流石は六番隊隊長と言った所か、ランサーとは比較にならん速度だ」

「……限定霊印で霊力を抑えているとはいえ、装束を傷をつけられたのは何十年ぶりか……いいだろう、貴公を尸魂界に仇なす敵と認め私の斬魄刀で葬ってやろう」

朽木白哉は初めて斬魄刀を抜き正眼に構えた。

「ならばこちらも相応の宝具で応えよう」

トレス・オン  
投影開始！

対する土郎さんは持っていた双剣を消し、代わりに一本の長槍が現れた。

二メートルはあるであろう真紅の槍は霊力に似た力を塵気楼のようにゆらり、と立ち上げている。

「……奇怪な術だ、先程の剣もその槍も霊力を放っているが斬魄刀でも鬼道でもない。技術開発局の者がいれば喜んで興味を持ったかもしれない」

「口上は結構だが、もう少し自分の心配をしたらどうかね。……どうやら貴様は自分が死ぬ光景など想像したこともないのだろうな」



「・・・下らぬ戯言はそこまでしておけ、どう足掻いたところで貴公が死ぬ事には変わらない」

「そうか、冥土の土産にと思ったのだが残念だ」

槍を僅かに下げ、姿勢を低くする土郎さん。

その構えはあたかも獲物に襲い掛かんとする獣に見える。

「往くぞ。その心臓、貰い受ける　　！！」

・ドン・

地を蹴った瞬間、爆発するような音が響いたと同時に土郎さんの体が瞬間移動したかのように朽木白哉の前に現れ、その槍を奴の足元めがけて繰り出した。

その明らかに見当外れの一撃を見て奴の顔に始めて落胆の色が挿した。

「散れ　　」

そしてそのまま斬魄刀の名を唱えようとする。

しかし土郎さんはそんな事に目もくれず、身も凍る殺気を放ったまま呼応するように槍に向かって言葉を紡いだ。

「刺し穿つ《ゲイ》　　」

言葉を受け鳴動した槍が霊力の猛りに揺らぎ、朽木白哉の斬魄刀は淡い桜色に染まる。

「千本・・・」

「死棘の《ボル》・・・」

両者の最後の言葉が紡がれようとした刹那。

「お止めください兄様、士郎殿!!」

「!?!」

悲痛な叫びと共に両者の間にルキアが割り込み、どちらかが死ぬであろう殺し合いを間一髪の所で止めた。

「・・・退けルキア、罪人のお前を捕えるのが我々の任務だが、障害となるようなら殺せとの命を受けている」

「恐れながら、この任務は彼の者が手を引き私が尸魂界に戻り謹んで我が身の罪を償えば何も問題がない筈です。それにこの件を中央四十六室に報告し、護廷十三隊が動けばこの者達の命など容易く葬れましょう、それまでこやつ等には片時の猶予を持たせ我々死神の秩序の前ではいかに無力を思い知らせるのも死神の責務かと存じます」

「・・・」

「な・・・何言っただよルキア・・・何のジョークだよ・・・こっち見るよオイッ!」

突然のルキアの変わり様に我を失って叫ぶが、ルキアは一瞬俺を一瞥しただけですぐに顔を逸す。

「・・・この者に至ってはわざわざ止めを刺すこともありますまい、捨て置いてもいずれこのまま息絶えましよう。もう一人の男も私にお任せいただければ兄様の手を煩らわせるまでもございません、朽木家にあるまじき数々の御無礼を雪ぐ機会を是非この不肖な妹にお与えください」

「・・・よかるう、お前の覚悟に免じてこの場は任せる」

「はっ、ありがとうございます」

そう言つて士郎さんに向き直り小さく何かを呟くと、突如鬼気迫る勢いで士郎さんに迫る。

「士郎殿、先日の大虚退治の事には礼を言います。ですが貴殿が護廷十三隊の隊長と副隊長に刃向かった罪は重い、しかし今すぐ副隊長の拘束を解き刀を収めると言うならこの場は見逃しましょう」

「・・・いいだろう、私としても避けられる戦いは極力避けたい、この場は退くでしょう」

士郎さんは背後で雁字搦めになっている布を消し、赤髪を解放した。奴は士郎さんを警戒しつつ朽木白哉の前まで戻ると頭を下げた。

「お恥ずかしい所を見せて、すみませんでした朽木隊長」

「よい、それよりも任務は果たした。引き揚げるぞ」

「何ですか隊長！！こんな訳の解らないやろーに舐められっぱなしじゃ死神の名折れですぜ」

「・・・私は引き揚げると言ったはずだ。二度目は無いぞ恋次・・・」

「ぐ・・・はい 解錠！」

赤髪の斬魄刀が空中の飲まれていき斬魄刀を鍵のように廻すと、空間に障子戸の形をした門が現れゆっくりと開いていき、ルキア達三人は俺達に背を向けて進んで行く。

「・・・土郎さん・・・何で・・・」

ルキアだけでなく土郎さんの変わり様にも驚いていると、土郎さんは血塗れの俺を担ぎ奴ら聞こえないよう小声で囁いた。

「落ち着け、総勢三千人はいる護廷十三隊を相手にするにはこちらもそれなりの準備が必要だ。お前もその状態では私の足手まといになるだけだ、ここは彼女の案に従った形にするのが最善だ」

「・・・けど・・・」

「いいか黒崎、彼女が何故あんな事を言ったと思う。彼女はあの攻防で本能的にどちらかが殺されると感じ、戦闘を中断させる事を優先した。もし私が死んだなら残った確実にお前は殺されるだろう、兄が殺されても今度は一日もしない内に護廷十三隊が総力を挙げて私達を殺しに来る、なら少しでも時間を稼ぎお前が生きて逃げ延びてほしいという希望に賭けたんだ」

「ルキアが・・・」

「先程彼女は私に”すみません、一護を頼みます”と言った。彼女の厚意を無駄にしない為にもここは耐えろ」

激痛で薄れる意識の中、振り返ったルキアの悲しげな顔を見て俺はそれが事実なのだと知る。

「ちく・・・しょ・・・う・・・」

士郎さんの肩に捕まらなければ満足に動けない惨めな俺の心を代弁するかのように冷たい雨が降っている。

門の向こう側へと消えて行くルキアはもうこちらを振り返る事はなかった。

そしてパタンと門が閉じ、ルキアはこの街から姿を消した。

- サアアアア -

降り頻る雨が全身を打つが体の痛みよりも情けなさで死にそうだった。

「俺はまた・・・ルキアに護られた・・・!」

ルキアを助けると意気込んでいながら、逆にルキアに助けられ、士郎さんの足手纏いになって、自分がいかに無力な存在なのかをまじまじと見せ付けられた。

「くそおおおおおおお  
!!!!!!」

自分と奴らとの圧倒的な力の差が悔しくて力の限り叫んだ。  
心の底から願った、もっと強くなりたいと・・・そしてわずかに残った気力も限界を迎え意識が途切れようとした時。

「私の自論だが、人間は大切なものを失う痛みを知った時本当の強さを知る、そして諦めず悲しみの運命を乗り越えた時、初めて成長し強くなれる。それを成せるかはお前次第だ黒崎」

士郎さんその言葉を頭で理解するより前に俺の意識は闇に落ちる。だが、自分では気付かずにその顔には確かな笑みが浮かんでいた。

――――

余程最後の言葉が効いたのだろう、普通なら痛みで苦悶の表情をする筈がその顔はとても穏やかだ。

だが気を失った黒崎の脈を見ると段々弱々しくなっていき、体温も下がっている。

（無理もない、急所を二ヶ所も貫かれ血も大分流しているからな。

このまま止血を施しつつ傷の治療と共に今後の為にも保険をかけておくか  
トレス・オン  
投影開始）

自身の半身ともいえる鞘をイメージした瞬間、あらゆる工程を省いて私の手に淡い光を放つ鞘《全て遠き理想郷アウアロン》が顕現する。

「セイバー、この少年に力を貸してやってくれ」

遠き日の記憶の彼女に願いを籠めながら魔力を注ぎ、神々しい光が溢れる《全て遠き理想郷アウアロン》を傷口に静かに添えた。

「うつ……！」

鞘の治癒力によって黒崎の傷は徐々に塞がっていき、顔色も少し良くなってきた。

そして鞘は光の粒子のように分解し、黒崎の体の中に染み込むように吸い込まれてゆく。

全て遠き理想郷を体内に入れておけば余程の致命傷でない限り傷の回復も早いだろう。

後はもう一人の怪我人である石田と呼ばれていた少年の治療をするだけだが、その前に……

「いやはや、話には聞いていましたけど凄いですね宝具と言うのは、久しぶりに興味が沸いてきました」

「覗き見ばかりしてないでお前も黒崎達を運ぶのを手伝え、浦原。こうなつた責任の一端はお前にある、黒崎は私が運ぶからお前は石田を治療してやれ、目測で見たただけだが傷は見た目ほど深くはない筈だ」

「わかりました、では黒崎さんを頼みます」

「……ああ」

黒崎を背負い、雨が降る夜の街を駆け抜けていく中、ふと後ろの黒崎を見る。

アヴァロン

全て遠き理想郷を埋め込んだ判断は間違いではないのだが、死に懸

アヴァロン

けの黒崎を全て遠き理想郷で助けた状況は在りし日私に似ている。

細部は違うが死神達の事もまるで第五次聖杯戦争の焼き回しのようだ、もし黒崎の歩む道が私と同じなら私はどうするべきだろう。

セイバーや凜のように黒崎の師になるのか、それともかつての私のように戦いを止めるべきなのか。

「……いや、今はよそう。世界が違っても正義の味方として私がすべき事は何一つ変わらない筈だ」

私は雑念を振り払うように強化した脚で大きく跳躍しながら雨で曇った空をただ見つめていた。

・そうしてこの世界に来て降った最初の雨はこれから始まる私と黒崎の戦いを告げる幕開けとなったのであった・



## 二話（後書き）

次回も更新は一月後になると思います（謝）

どうにも一日数行のペースは相変わらずで、皆様に迷惑をお掛けしてすみません（礼）

よろしければ是非感想の方も宜しく願います（爆）

### 三話（前書き）

更新が滞ってしまつてすみません。

今回はシリーズ初のオリジナルスキルを登場させました、停滞しているこの物語に新しい息吹が吹くといいなと思っています。  
では、どうぞお楽しみください！！

### 三話

「想う力は鉄より強い、半端な覚悟ならドブに捨てましょ・・・さあ、十日間アタシと殺し合い、できますか？」

「・・・士郎さんが言ってたけど、強く成れるかはお前次第だって言われたんだ。だったら強くなってやろーじゃねえか！」

あの死神達と邂逅した次の日。

目を覚ました黒崎は己の無力さに齒噛みし自信喪失していたが、私と浦原の言葉で前へ進む決心がついたようだ。

そして特訓という名の奇妙な修行は始まった。

だがその内容は、門外漢の私でも熾烈を極めたモノだった。

当初は浦原達四人で黒崎が始めたの修行風景を眺めていたが、次の段階の特訓では死神の力を取り戻す為だと称して黒崎の因果の鎖を断ち切り、危うく虚になる所だったが不幸中の幸いか無事に死神に戻れたようだ。

- パチパチパチパチ -

「オメデトさーん キッチリ死神に戻れたじゃないスカ！お見事！レッスン2、クリアー！！」

「やかましい！！」

「あうっ！！」

拍手と共に浦原の軽薄な声が響き、それに黒崎がつっこむ。

「フフ・・・俺が生きて戻ったのがためーの運の尽きだぜ・・・俺は誓ったんだ！！生きて穴から出たら必ず！！てめーを！！ブツ殺す！！！」

流石に今回は黒崎の意見に同意したくもなる、一步間違えば取り返しつかない事態になっていたからな。

「・・・そんじゃあ丁度いい。その気合い使ってこのままレッスン3に入っちゃいますか！」

しかし浦原はのらりくらりと相変わらずのマイペースで最終課題を発表する。

その課題は斬魄刀で帽子を落す事。  
なんともシンプルだがこのレッスンは戦闘訓練も兼ねていたので、それからは一方的な展開が続いている。

「くそ！！なんで俺はあんな細い剣なんか追い詰められてんだ、ありえねえだろ！！！」

「一つ教えてあげましょう、レッスン3の目的は自分の斬魄刀の名を知る事です。知ってましたか、斬魄刀にはそれぞれに名前があるんす。そしてこれが彼女の名前・・・いくよ”紅姫”」

斬魄刀の名を紡ぎ刀身を変化させる浦原に、もう軽快な表情は消え失せている。

そして斬魄刀を黒崎に振り下ろし、背後の岩石に当たった瞬間。

- ドガン -

刀の一撃は巨大な岩を粉碎し、細かく砕けた破片が周囲に飛び散った。

「できなければキミはもう一度死ぬ事になりますよ」

「ザン」

二撃目で黒崎の持っていた斬魄刀は容易く砕け散り、柄だけが残る。予想はしていたが斬魄刀の名を解放してからは圧倒的だ、実力差もあるがやはり丸腰の状態では勝負にもならない。

「さて、刀は無くなった。どうします？まだ、そいつで向かってきますか？なに、アタシの帽子を落すだけだ、その柄だけでもできないことじゃない。だけど、それはもう度胸や勇氣じゃないってだけの話・・・先に言っておきましょうか」

霊力が溢れると同時に身を刺すような殺気が放たれる。

「まだその玩具でアタシと戦う気なら・・・アタシはキミを殺します」

初めて向けられた本気の殺気に本能的に打ちのめされた黒崎は、もうただの少年でしかなかった。

逃げて、逃げて、逃げて・・・それでも死は追いかけていく。

自身の恐怖を乗り越えなければ先に進む事など出来ない、それが人間の持つ強さであり弱さでもある。

黒崎がこの試練を自分で乗り越えなければ決して前に進む事は出来

ないだろう。

そんな折、唐突に黒崎の動きが止まり浦原もそれにならうように立ち止まった。

「おい・・・何だよ？二人とも止まっちまったぞ・・・！？」

諦めて虚勢を張っている訳でもない、かといってその顔に恐怖の色も浮かんではいなかった。

ただ、この場を運命にも似た力が支配している。

それが解ると同時に浦原が刀を構え、黒崎もその気配を感じ斬魄刀の柄を握り締め、背を向けたまま腰溜めに構えた。

「・・・これは！！」

霊力の昂ぶりと同時に斬魄刀の真名が紡がれた。

『斬月！！！！』

凄まじい霊力の波が一面を覆い、土煙となって周囲に襲い掛かる。そして土煙がゆっくりと晴れた時、黒崎の手には柄のない出刃包丁のような斬魄刀が顕現していた。

「何だ・・・あの斬魄刀・・・？柄も鍔もありやしねえ・・・マトモな刀の形してねえじゃねえか・・・あれじゃ前の方がまだマシだぜ・・・」

子供達はその見かけ倒しの形状を見て呆れているが、しかし私や浦原は斬魄刀から滲み出ている力の奔流を感じ取っていた。

解析してみたが内包されている霊力の総量もAランク宝具に引けをとらない、まさに現代に誕生した宝具そのもの、後はその斬魄刀を十全に使いこなせるだけの技量を身に付けるだけだ。

「さてと、そいじゃ斬魄刀も出てきたところで、本格的にレッスンはじめましょうか！」

「……わりい、浦原さん……うまく避けてくれよ」

「はい？」

「多分、手加減できねえ」

言うや否や先程の比ではない霊力が新たな斬魄刀”斬月”の刃先に集中する。

「不味い　　浦原!!」

「!?　　啼け!紅姫!!」

巨大な刀身が振り落とされた瞬間。

- カッ -

眩い閃光と共に文字通りの斬撃が放たれ、地面や岩などを薙ぎ払いながら突き進んでいく。

そして飛ばされた斬撃が収まると、そこには見るも無残な大断層ができていた。

「これほどの威力とはな……浦原、お前は未恐ろしい男を目覚め

させたようだな」

「ええ、全く。まあ、なにはともわれレッスン3、終了ス」

地面に落ちた帽子を拾い、土を払いながら答える。

黒崎は霊力の使いすぎたのか新月に寄り掛かるように眠っている。

「どうやらお前の特訓は相当堪えたと見えるな、虚になった時は流石に肝が冷えたが大事に至らなくてなによりだ」

「・・・意外スね、衛宮さんならもつと怒ると思ってましたが、案外冷静なんですな」

「別にやり方は間違っていないからな。私は手順を一步間違えれば死の淵を経験するような鍛練を毎日、毎晩のように繰り返していた。それだけ魔術を使うという事は常識から離れると共に危険が伴う、故に魔術師は常に死を覚悟しながら一つの目的の為に魔術を用いている集団なのだよ」

実際、私や凜達が特別なだけで他の魔術師は根源のみをひたすら目指している。

今思うと凜との不思議な縁は運命の必然だったのだろう。

「やれやれ、正直アタシは魔術師とやらの正気を疑いますよ」

「ふ、否定はせんよ。魔術は学問と言われているが、その実研究の為なら他の人間の命がどうなるかと手段を選ばん連中が大半だったからな。かくいう私も人間の感性を捨てた時期があった、案外今も何処か壊れているかもしれん」



眠る黒崎を寢室に移す為に何時かの夜のように抱えた私に浦原が声を掛ける。

「だとしても現状では一番頼りになります。どうか尸魂界では彼の助けになつてあげてください」

「任せておけ、護廷十三隊に狙われている以上、どの道私も尸魂界に行くつもりだ。それにどうも黒崎は他人とは思えなくてね、もう少し様子を見たくなった」

恐らく黒崎をかつての自分に重ねているのだろう。

そしてその顔が愛憎の入り混じった微妙な表情だったとは、暢気に寢息を立てている少年には知る由もなかったのであった。

あのレッスンと称した特訓から十四日後、いよいよ尸魂界に出發する日を迎え、突入メンバーは地下の勉強部屋に設置された穿界門と呼ばれる門に集合していた。  
その中でも修行を終えた黒崎と石田は頼もしいメンバーと言えるだろう。

だと言っのに……

「初めまして　！あたし井上織姫いのうえ おりひめと言います！！好きな食べ物はチーズとバターで趣味はお笑い、石田くんと同じ手芸部に入ってるのでこれからもよろしくお願いしま　　す　　」

「あ・・ああ、衛宮士郎だ、よろしく」

尸魂界に突入するメンバーで紅一点の明るい少女、井上織姫。第一印象はとにかく笑顔を絶やさない子で

「あの、一つ聞いてもいいですか！！」

「なになに」

「その髪の色からして、もしかして凄いいじいさんなんですか？」

「……いや、この髪は地毛だ」

「わ　　！じゃあ外国の生まれなんですね！！すごいな　　あたしも行ってみたいです　　」

どこかズレている子だった。

……気を取り直してもう一人のメンバーに向き合う。

「……どうも……俺は茶渡泰虎さとう やすとら……よろしく」

「よろしく、衛宮だ」

手を差し出し握手する。

見た目通りに寡黙な性格のようだ、私としてはこれくらい静かな方が接しやすい。

この二人の力は、私が初めてこの世界に来た日に能力の片鱗を見せてもらったので戦力としては大丈夫だと思うが戦闘経験は素人も同然だろう。

不安は残るがそこは私がカバーするでしょう、そして最後の極めつけは

「なんだよこのメンバーは！男ばつかでむさくるしいったらありやしねえ。それとおっさん、井上さんに手を出したらこのコン様がただじゃおかねえぞ！！」

「静かにせんか馬鹿者！！お主らこれから尸魂界に行くというのに気が緩み過ぎじゃぞ！！」

喋るヌイグルミに果ては喋る猫・・・このメンバーに不安を感じるのは私だけか・・・。

「ハイハイ、皆サイン。そろそろ門の説明をしますからよく聞いてくださいー」

意識を浦原に向け説明を聞く。  
意外なことに、手を叩きながら穿界門の説明をする姿はまるで引率の先生のように似合っていた。

「いいですか、繰り返しますが我々が穿界門を尸魂界へと繋いでいられる時間はもって4分！もし断界にある拘流に捕まったら最後、キミ達は断界に永久に閉じ込められることになります、十分注意してくださいねー」

通り抜けの際の諸注意を聞き、覚悟を決めた全員はついに尸魂界に続く穿界門をくぐったのであった。

-----

# 【Side 一護】

門をくぐった先に現れたのは床一面に敷き詰められた骨の道、その横を黒い塊の壁が犇き合っている。

まるで本に出てくる地獄の墓場そのものようだ、まあ死神が墓場と言っている時点で相当縁起が悪いだろう。

-ドシャ-

そんな事を考えていると黒い壁が崩れていき迫るように追いかけて来た。

「さあ！呆けるな！走れ！！拘流の壁が追ってくるぞ！！」

「おいおい、マジかよ」

拘流に巻き込まれないよう全力で走る。

そして中間に差し掛かった所で拘流の塊がすぐ脇に落ちてきた。

「え？うわっ！？」

「石田ッ！？」

服が拘流の塊に絡め取られ引きずり込まれようとしていた、石田を

助けようと斬月の柄に手を掛けるがそれを夜一さんが一喝した。

「斬魄刀は使うな！拘流は霊体をからめ取る！斬魄刀を振るえばそれごとおぬしもとらわれるぞ！！」

「じゃ・・・じゃあどうすりゃ・・・」

うろたえる俺達の中で真っ先に動いたのは士郎さんだった。

・ザシュ・

取り出した剣でマントの部分を切り裂き、その剣を拘流に向かって投げつけると同時に剣が爆発する。

「しんがりは任せろ、お前達はただ前だけを目指して走れ！！」

「すまねえ、士郎さん」

士郎さんに促され再び走り出す俺達、本当に士郎さんがいてくれて助かった。

後はこのまま突っ走るだけだ。

そんな折、不気味な音が響き振り返ると、拘流の中から巨大な物体がもの凄い速さで迫ってくるのが見えた。

「な・・・何だこいつは！？」

「拘突じゃ！！七日に一度しか現れぬ掃除屋が・・・何も今出ずともよいものを！！とにかく逃げろ！！此奴は恐ろしく速いぞ！！」

蛇ように追いかけてくる列車の化物からただ必死に逃げる。

だが全力疾走しても徐々に差は縮んでいき、その距離はもう数メートルにまで迫っている。

「急げ！じき出口じゃー！！」

あと少しで出口だというのに拘突との距離はもう一メートルもない、このままじゃ間に合わねえ。

「だ・・・ッ、ダメだ・・・！逃げ切れない・・・」

拘突に追いつかれる事を皆が覚悟したその時、

「全員出口に向かって飛び込め！！」

「「「え！？」「」」

士郎さんは拘突の前に立ち塞がると迫り来る拘突に向かって右腕を突き出した。

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .  
《体は剣で出来ている》」

そんな呪文のような言葉を告げた瞬間、

「熾天覆う七つの円環！！！！！！！！」  
ロー・アイアス

右手から七枚の鮮やかな大きな花の盾が咲き誇り、拘突と衝突する。花の盾は拘突を一時的に食い止めたがあまりの重量差に耐え切れず士郎さんごと俺達を出口に吹き飛ばした。そして一瞬の浮遊感の後、出口を潜り抜けた先には澄んだ青空が広

がつていた、だがその景色を見る間もなく強烈な加速が体を襲ってきた。

「嘘だろおおおおおお」

「!!」

まるで自分が投げられたボールのように地表に落下しているのが見える。

このまま地表に激突するのと思った矢先。

「男が情けない声を出すな、我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）！」

鋭い声と共に体に赤い布が巻きつき俺の体を押し上げた。

「この布はあの時の!？」

周りを見ると井上も石田もチャドも夜一さんも同じように赤い布が巻きついている。

その脇を高速で通過する影があった。

「士郎さん!!」

「ドガ」

着地の勢いで地面が陥没するが士郎さんは気にせず掴んでいた赤い布を順番に一本ずつ引き寄せる。

次々と皆の体が受け止められる、それこそキャッチボールのような光景だ。

最後に俺を受け止めると赤い布は初めから無かったように消えていった。

「大丈夫か？手荒に扱ってしまつてすまない」

「いいえ、本当に助かりましたよ土郎さん、一時はどうなるかと思いました」

「あの花の盾とても綺麗です！こかつたです！！一体どうやったんですか？」

「・・・ありがとう・・・助かつた・・・」

珍しくあのチャドからも賛辞の声が上がる。  
俺も礼を言おうとしたが、それより先に怒声が響く。

「このたわけ！！おぬし儂の話を聞いとらんかつたのか！？拘突に触れたのがあの花の部分だったからよかつたものの、お前自身が触れておつたらおぬしの命はなかつたぞ！！」

「少なくともアイアスを突破されない確信はあつた」

「そついう問題ではない！！」

「いいじゃねえかそんな怒んなくても！結果的には全員助かつたんだしよ！」

「おぬし・・・事の重大さがわからぬようじゃな・・・」

「それよりも、ここが尸魂界なんだろ。なんか随分イメージと違うな」



「・・・ここは流魂街るこんがいと呼ばれる場所じゃ。尸魂界へと導かれてきた魂が最初に住まう処で、死神たちの住まう瀟靈廷せいれいていの外縁に位置する。じゃから間違ってもあちらにある瀟靈廷には・・・」

「よっしゃ！あっちにルキアが捕まってるんだな！！」

夜一さんの話を切り上げ、一番乗りに突入する。

「な・・・ッ！？話を最後まで聞かんか莫迦者！！死にたいのか！！」

「え？・・・うわ！？」

後ろから強烈な勢いで連れ戻され、途端に目の前に拘突と同じくらいの壁が瀟靈廷を囲うように降ってきた。

「迂闊に動くな！お前が軽率な行動を取ればそれだけ仲間を危険に晒されるんだぞ、そこをちゃんと理解しろ！」

「す・・・すまねえ、士郎さん・・・ん、何だ・・・？」

土煙が視界を覆っているが、門に誰かの気配を感じ振り返ってみると。

「・・・久す振りだあ・・・通廷証もなすにこの瀟靈門をくぐろうどすだ奴は・・・さあ！オラの相手はどつづだ」

巨漢・・・この言葉しか言い表せない程の巨人が俺達を見下ろしていた。

あ、あの口ぶりから察するに、この門の番人らしいな。

「なんだあ、お前え餓鬼を連れでるでねえか、オラは弱え者いじめがでえ嫌れえなんだ、怪我しねえ内に早くけえりな」

「何だと！！おもしれえじゃねえか！だったら俺が相手をして・・・  
・おわあ！？」

・ブン・

熱くなつた黒崎を首根つごとと石田達の所まで放り投げる。

戦いになれば自らも戦おうとして、私の邪魔になるのは目に見えている。

ならば今後の後学の為に私の戦い方を見せておくでしょう。

「いいか黒崎、戦闘に置いて最も効率のいい戦い方は《相手に力を出させない》事、簡単に言えば相手の出鼻を挫いて本気を出す前に速攻で倒せばいい。お前にはそれを成せるだけの力がある、そこでよく見ている」

最も私の場合は長年培ってきた洞察力によって戦っている相手の癖や体の向き、筋肉の流れなどを明細に見極めながら戦っているので、黒崎にこの戦法を指南するのは無理だろう、ならば斬魄刀と持ち前の強力な霊力を武器に最速で敵を倒せばいい、これならシンプル故に初心者でも大丈夫だろう。

「おい、なにごちゃごちゃ言ってるだ。お前えオラを無視するとは

いい度胸してるでねえか」

「それはすまなかった。では早速で悪いがそこを通してくれないか？中に知り合いがいてね陣中見舞に行きたいんだ」

「・・・お前え礼儀がなつてねえな、さでは田舎もんだべ？通廷証がないやづは絶対に通さねえど、どうしてもここを通りたきやオラを倒すんだな」

「そうか・・・残念だ

トリス・オン  
投影開始」

左腕を掲げ、岩を削って作られた無骨な斧剣を投影する。  
ギリシヤの大英雄ヘラクレスが用いていた身に余る巨大な質量の斧剣を強化した左腕で掴み、頭上に掲げた。

「いくど~~~~!!」

バーサーカーよりも大きな番人は持っていた斧を高々に振り上げると一気に振り下ろした。

- ガキン -

弾け合い極大の火花を散らす両者の得物、しかしその均衡は全く動いてはない。

番人はまさか自分より小さい男が渾身の一撃を受け止めるなど考えてもいなかったのだろう、一瞬驚き再び斬り返して叩き込もうとした動作の隙を見逃さない。

「  
トリガー・オフ  
投影装填」

八点の急所に狙いを定め、斧剣を腰ために構える。  
そして……

「セット全工程投影完了

是、射殺す百頭」ナインライフズブレイドワークス

八閃の神速の連撃を叩き込んだ。

「ぐああああああ

!!!!!!」

全身を打ち抜かれ、地響きを立てながら倒れ込む。

「いだい……いだい……オラ、死んじまうよ……」

「安心しろ、刃を返して峰打ちにしておいた。流石に関係ない者を殺す訳にはいかんからな」

「へ？」

悶絶する度に地震を起こされては敵わんで教えておく。

「敵同士だと言うのに門番のオラの事を思っで手加減してくれただか……」

番人は体に打撲痕があるだけで血が出ていない事を確認するとずずいっと顔を近付けてくる。

「……お前え……」

このまま息が掛かる距離まで近付き、顔を俯いた瞬間。

「いい奴だなあ・・・!!」

ボロボロと泣き崩れる巨大な番人の姿があった。

なんでも自分を殺せたのに、あえて殺さなかった姿勢にいたく感動したらしく、戦士としても男としても完敗したそうだ。

更に私達全員を瀟靈廷に通してくれるというおまけ付きだ。

「ありがとう、助かるよ？丹坊。じだんほうもし罪に問われたら脅されて無理やりやらされたと言えば罪も軽くなるはずだ」

「いいつでことよ、オラはお前えの漢気に惚れたんだど、これぐれえお安い御用だで。・・・さあ、門開げるがらのいでぐれ」

そういつて門に下側に手を掛け、巨大な門をゆっくりと持ち上げていく。

そのまま門が開ききろうとする途中で？丹坊の動きがピタリと止まった。

その顔は蒼白に染まり、恐怖に慄いている。

「どうした、？丹坊？」

視線を辿ると門の前に白羽織の優男が銀髪を風に揺らしながら立っているのが目に入った。

「・・・誰だ、あいつ？」

「さ・・・三番隊隊長・・・市丸ギン・・・」

様子を見に来た黒崎が？丹坊に聞いてみるが、返って来た答えは黒崎に向けられたものではなくただ無意識に呟いたものだった。

「あア、こらあかん・・・」

「！！！」

途端に鋭利な切っ先が音速に近い速度で黒崎と？丹坊に迫る。

「いかん！？

トレース・オン  
同調開始」

両脚に強力な強化を施し、体内魔力の大半を脚に集中させ・・・

フースト・インクリス  
《追加増強！！》

一気に解放した。

・ギイン・

魔力放出と強化を同時に行う事による超加速で一瞬の内に黒崎の前に出ると投影した干将・莫耶で奴の剣先を切り払う。

朽木白哉に速さで負けて以来、試行錯誤していた対策の一つで通常の魔力放出では朽木白哉の速度に追い付けない為、放出量を大幅に底上げし強化の強度と耐久力を併用する事で一時的に3倍の機動力を得られ応用すれば同様の攻撃力も発揮する事が出来るのだ。

問題は体の負担があまりに大きく五分の限界時間があり、それを超えるといくらサーヴァントの肉体といえども耐え切れず自滅しまう。

仮に魔力放出と強化を合わせたこの技法を追加増強と名称するとする、しかし皮肉な事に、追加増強はいかなる戦局を覆す事ができる切り札であると同時に諸刃の剣と言える。

「はは　　ボクの神鎗に対応したんか・・・やるなあキミ」

「随分と手荒い挨拶だな、護廷十三隊の隊長というのは全員ひねくれた戦闘狂ばかりなのか？」

音速の攻撃を音速を超えるスピードで弾き返す。

言葉にすれば簡単だが実行するのは限りなく困難だろう、実際黒崎達は何が起きたのかいまいち解っていないらしい。

「おもしろい事言うなア、名前はなんて言うん？」

「貴様の上司から噂くらいは聞いているだろう、衛宮士郎だ」

「へえ　　アンタが・・・じゃあ、あそこにいる萱草色の髪をした子が黒崎一護かな？」

「・・・・・・・・」

「なんだ？知ってんのか、俺のこと」

「そうかア、キミが・・・それになんかも知ってそうな強い兄ちゃん・・・これから尸魂界はだいぶ荒れそうやなア」

薄ら笑いを浮かべた顔で呟くと、奴は朽木白哉並の速度で距離を取り腰の斬魄刀を抜いた。

しかし引き抜かれた斬魄刀は脇差と同じ長さの小刀、だが死神の斬魄刀が普通でないのは承知している、ましては隊長クラスなら相当危険な能力の筈。

「ドンッ」

魔力放出で相手が斬魄刀を構えるより先に干将・莫耶で斬りかかる。しかし流石に隊長クラスとなれば一筋縄にはいかず、市丸ギンは涼しい顔で連撃を器用に捌いている。

「意外やなア、こないな脇差が怖いんか？」

「生憎、場数はそれなりに踏んでいてね、外見に騙される程愚かではない。それに戦闘では相手の厄介な能力は封じておくに限るからな」

「やるなア、けど残念やったね・・・キミは隊長各と戦う経験が足らんかったようや」

何を言っているのか計りかねていると、どういう意図なのか斬魄刀を突き主体の構えに変え、何の変哲のない普通の突きを放った。それを干将・莫耶で完全に防いだ瞬間、

「シュン」

「な!？」

突然、斬魄刀の刀身が私の顔を目掛けて迫ってきた。

伸びた刀身をかろうじて動体視力で見切り、避すことができたが、体勢を崩した一瞬の隙を付いて奴は大幅に距離を取った。

「凄い、凄い。今のを避けはるとは流石やねえ」

「・・・何故だ、六番隊の隊長と副隊長は斬魄刀の解放に名前を言



つていた筈」

「ええ事教えたる、隊長各は皆二段階の斬魄刀解放『卍解』を会得しとる、卍解を会得した死神は名前を呼ばんでも始解することができるんや。こないな風にね」

伸ばした刀身を突きつけ、再び脇差の状態に戻し得意げに笑う市丸ギン。

恐らく奴の斬魄刀の能力は奇襲に特化した伸縮自在の刀身、奴が距離を取っている理由はアウトレンジからの奇襲が一番効果を発揮するからだろう、しかし逆を言えばクロスレンジからの攻撃を苦手している事を表している。

「悪いがその隙を衝かせてもらう」

一気に懷に飛び込むべく突撃体勢に入る。

奴も突きを重視した構えを取り一触即発の空気が流れる。

・ドンッ・

・シュン・

それから3秒もしない内に魔力放出と斬魄刀は同時に解き放たれた。伸びる刀身と弾丸と化した体は一瞬の交差の後、互いにすれ違う。

（やはりな、奴の斬魄刀のもう一つ弱点、それは伸縮の速度と予測のしやすさ。確かに一直線な分、常人からは目にも止まらぬ速さに見えるが、捉えきれない程の速度ではない。加えて直線であるが故に、切っ先を見切れれば軌道も容易に予測できる）

初見ならともかく、不意打ちを狙って一度能力見せたのは失敗だったな。

切っ先と体が入れ違う中、後少しで剣の有効範囲に届こうとした時。

「ええんか？ 避けはって、後ろの子に当たっても知らんで」

「っ！？」

振り返ると未だ私達の戦いを呆然と見ている黒崎に奴の斬魄刀が迫っていた。

そこようやく奴の狙いを知った。

「くそ！！ワザと斬魄刀を避けさせ、黒崎を狙っていたのか！！」

目標を奴から斬魄刀に変え横から叩き折るつもりで干将・莫耶を振るう。

しかし渾身の一撃は惨めに空を切った。

「残念 黒崎一護はあの方のお気に入りやからな、ボクは最初からキミを狙ったよ」

刀身を元のサイズに戻し、再び奴の術中に嵌ってしまった私に再度高速の突きが放たれた。

「射殺せ『神鎗』」

放たれた刀身は顔面ではなく避けれない胴体の心臓に向かって突き進んでいる、確実に殺すつもりなのか速度も先程とは桁外れだ。

「くっ!!」

仮に避けたとしても次は本当に黒崎を狙う可能性もある、迎え撃つしか方法はない。

- ガキン -

寸前で干将・莫耶を重ねて刀身を受け止めるが、不用意な姿勢からでは踏ん張りが効かず体ごと吹き飛ばされる。

「くううううううううううう」

「!!!!!!」

そのまま体を押し出され、呆然と門を支えていた？丹坊に激突し門の外へ弾き出された。

刀身はそこで戻っていったが、私は背後の？丹坊に圧迫されつつもまだ宙を飛んでいる。

「「「士郎さん!!」「」」

仲間達の驚いた声が響く。

慣性の法則によって吹き飛ばされていた私はすぐに干将・莫耶を破棄すると右手で？丹坊の服の襟を掴み、左手で再び斧剣を投影して勢いよく地面に突き刺した。

- ガガガガガガガガガガ -

地面を挟り取りながらスピードを緩めていく中、地鳴りのように門が閉まっていき、その向こうでは斬魄刀を鞘に納めた市丸ギンが笑いながら手を振っていた。

「バイバ イ？」

そして勢いが完全に止まった頃には、もう門は堅く閉ざされていたのだった……

――

瀟霊廷の西門前。

旅禍を迎撃した市丸ギンの傍らには二人の人影が立っていた。

「どうだギン。直接彼と戦った君の感想は、彼の使う術式の一端くらいは掴めたか」

「そうですね・・・正直なところ、ボクにもようわからんですわ。ただ、もしあの衛宮ゆう人が本気になったら隊長各と同等かそれ以上に厄介な相手になると思いますわ、もしかしたら藍染さまより・・・」

「口が過ぎるぞ市丸！！」

「いいんだ要、衛宮士郎は私でも予想できなかった全くのイレギュラーだ。あの未知の術式もさることながら隊長各に迫る実力に冷静な判断力と洞察力、どれを取っても我々とは一線を成している。黒崎一護とは違った意味で関心が尽きない相手だ」

「しかし分かりません藍染様。この110年間、尸魂界にそんな男の情報は一切入っておりません。人間なら寿命、霊ならばこちらの網に掛かるか虚になっているはず。奴は一体何者なのでしょうか」

「まあいいさ、今はまだ泳がせておいても問題はない。それより朽木ルキアの崩玉を優先する。ギン、要、この後は予定通りの行動に移れ」

「はい」

「はっ！！」

二人は消えるようにその場を離れ、その場には眼鏡を掛けた柔和な男だけが残った。

「衛宮士郎か・・・君が何を成す為にこの尸魂界に来たかは分からない、だが・・・」

表向きは常に笑みを絶やさない男はこの時初めて本当に愉しそうに笑みを浮かべた。

「ようこそ、私は君を歓迎するよ衛宮士郎」

・この瞬間、闇を従えた破壊者と世界の守護者の戦いは静かに火蓋を切ったのであった・

### 三話（後書き）

どうでしたか？

オリジナルスキルと言っても元ネタはアレなんですけどね・・・まあ、この案はCrossOverGuardianを始める前から思想していた私のお気に入り設定でして、後2・3程登場させたい設定があるのですが今回の反応次第でやめる可能性もあるので是非感想の方をお願いします。

もし問題がないようでしたら私の初期構成を生かして衛宮士郎をどんどん強くさせようかと思えます、それではまた次回に会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6562s/>

---

Fate/CrossOverGuardian 第三章『BLEACH編』

2011年9月4日20時46分発行